

今こそ 利他の心

日本人の心のあり方について考える「薬師寺まほろば塾」の和歌山塾(法相宗大本山薬師寺、読売新聞社主催)が7月24日、和歌山市の和歌山県民文化会館で開かれた。2月に発生したトルコ・シリア大地震の犠牲者追悼と復興祈願の法要に続き、映画監督の田中光敏さんが講演。田中さん、塾長を務める同寺の加藤朝胤管主、大谷徹英執事長が、人の絆や心について語り合い、約160人が聴き入った。



講演や鼎談に先立ち、薬師寺の僧侶と西山浄土宗に属する和歌山県内の「南部青年僧の会」の有志により、トルコ・シリア大地震の犠牲者を悼み、復興を祈願する法要が宗派を超えて営まれた。

薬師寺の薬師三尊像(国宝)の等身大の掛け軸を掲げた舞台上、追悼と復興の法要を超えてともに法要を営む僧侶(7月24日、和歌山市)。

宗派超えて追悼法要

祈りを込めたお写経が供えられた。南部青年僧の会の4人が仏を会場に招く声明を唱え、薬師寺の5人がハスの花びらを模した「散華」をまき、最後は全員で読経。参加者も手を合わせて被災地に心を寄せた。

導師を務めた加藤管主は、「トルコと関係の深い和歌山で、皆さんと一緒に法要をできたことはありがたい」と話していた。



加藤管主から支援金の目録を受け取る島氏(右)

参加費など 100万円寄付

和歌山塾の参加費は全額、トルコ・シリア大地震の復興支援金として寄付された。薬師寺に寄せられた募金とあわせて100万円の目録を加藤管主が、在和歌山トルコ名誉総領事を務める島精機製作所

(和歌山市)の島正博・名誉会長(86)に手渡した。同社は横編み機の輸出でトルコとゆかりが深く、2022年から本社に名誉総領事館が置かれている。島氏は「長年、感謝の気持ちで(トルコと)つながってきた。支援金を復興に役立てたい」と喜んだ。

- <近畿>
 - サントリーホールディングス
 - 近鉄百貨店
 - パナソニックホールディングス
 - 大阪シティ信用金庫
 - 岩谷産業
 - ワコールホールディングス
 - 今日庵
 - 小山
 - 佐藤木材
- <中部>
 - トヨタ自動車
 - 東海旅客鉄道
 - 東海理研
- <関東>
 - ウェルリンク
 - ヒノキ新薬
 - エヌエスティ・グローバル
 - 遠州茶道宗家
 - クオールホールディングス
 - 山田合同事務所
- <九州>
 - はせがわ
- <東北>
 - 熊谷電気

薬師寺まほろば塾に協賛しています(順不同)

大谷 「海難1890」はトルコでも撮影されていますが、外国の人たちにやりたいことをどのように伝えられたのですか。

田中 日本と違ってトルコの撮影は、必ずスタッフも演者も一緒にご飯を食べることから始まります。パンを片手に、ワイワイとコミュニケーションが始まり、現場に温かい空気が流れる。「同じ釜の飯を食う」と言いますが、食事の場を共有し、会話をすることの大切さを教えられました。

加藤 薬師寺でもかつて、夕方5時を過ぎたら門を閉じて、高田(好胤)和上が弟子を集めてキャッチボールをしました。高田和上は、みんなが集まって食べる時は、若者同士が話すのをじっとお聞きになっていましたね。

大谷 接点を持ってしゃべらないと、人間の心の中は分かりません。みんなが食卓を囲むことが重要じゃないでしょうか。今は会話がなくなつて、スマホに向かってばかり。これでは国も人も良くなりません。ないかと心配しています。

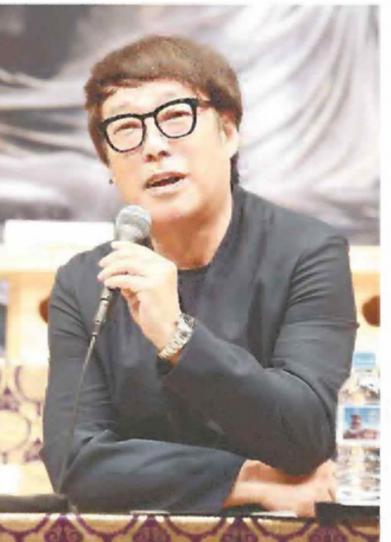
田中 私たち自身が、生き方や価値観を変えていかなければいけない時期に来ていると思います。便利さや物欲を追い求めて、近代化、都市化が進んできたけれども、本当にそれでいいのでしょうか。

加藤 良い情報も悪い情報も、自分の意思とは関係なく入ってくる。それをどう取舍選択するか。仏教では「熏習」と言いますが、いろいろな影響が体に染みついていて、何かがあるとなかなか出てくる。盗み食い、盗み聞きもそうです。その悪い種が芽を出さないようにするのが修行、訓練だと思うんです。心の種まきをしっかりとしないといけない。



大谷徹英 薬師寺執事長

おおたに・てつじょう 1963年、東京都生まれ。17歳で入山し、高田好胤和上に師事。龍谷大大学院修士課程修了。2019年から現職。「心を耕そう」をスローガンに全国各地で法話活動を続けている。

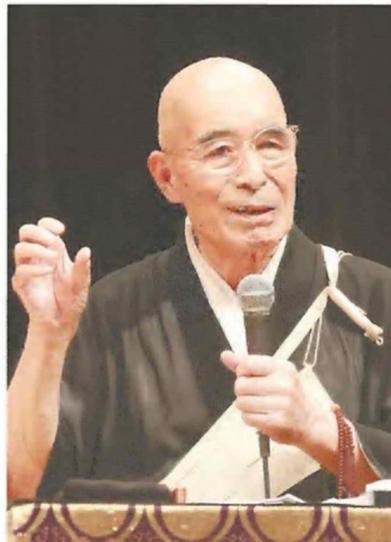


田中光敏 映画監督

たなか・みつとし 1958年、北海道生まれ。2015年制作の「海難1890」は日本アカデミー賞優秀監督賞、優秀作品賞など10部門で受賞した。大阪芸術大映像学科長、和歌山大国際観光学術センター客員研究員。

「みんなを支える」意識

価値観変えるべき時



加藤朝胤 薬師寺管主

かとう・ちゅういん 1949年、愛知県生まれ。23歳で入山し、高田好胤和上に師事。日本大法学部、龍谷大文学部卒。2019年、管主に就任。薬師寺宝物管理研究所主任研究員も務める。近著に「唯識 これだけは知りたい」など。

「悪い種」芽出さぬ修行

大谷 心に訓練が足りない、身勝手な生き方になってしまつて。自分は地球人、日本人、家族の一員で、みんなを支えていかなければいけない。「ちょっとだけ」「自分が良い」としても入れたかったセリフが

「今だけ、金だけ、自分だけ」。利他の心を持たない大人が世界中に増えてしまっている気がします。親子や親同士、パートナーがもっと触れ合っべきです。

大谷 伝えることはすごく重要。映画もそのツールであると思えます。制作中の映画「北の流水」(仮)についても教えてもらえますか。

田中 (北海道の)襟裳の若い昆布漁師たちが、海やまちを守ろうと立ち上がり、緑化に奮闘するという史実を基にした内容で、来年クラクインします。ベストセラーの映画化などではありませんが、本当に伝え残したい、という思いで作っています。

大谷 最後に、自分の心の指針にされていることを教えてください。

田中 人は心で生きています。心を元気に、前を向いて生きていくというのを大切にしなければいけないと感じています。

加藤 映画が「コマ」コマの積み重ねで私たちに感動を与えてくれるように、心も一瞬でできるものではなく、毎日の積み重ねです。私たちは、その道案内をできればと思っています。

大谷 共通するのは、やはり人は心で生きていく、ということ。皆さんも、心を大事にお過ごしください。

和歌山とトルコ 紡いだ絆

「海難1890」は、1890年に今の和歌山県串本町沖で起きた、トルコの軍艦・エルトゥールル号の海難事故で船員を懸命に救った人々と、約100年後のイラン・イラク戦争から逃れる日本人を助けてくれたトルコ人の物語です。トルコ・シリア大地震を受け、再び上映して寄付を募ろうという善意の動きが各地で起きています。

きっかけは大学の同級生だった田嶋勝正・串本町長の手紙でした。「うちの町には誇れる話がある」と。この物語には、私たちが大切にしなければいけない心があると感じました。今も和歌山とトルコは友好関係を紡いでいます。こうしたことが世界中で行われれば、世界は平和になる。映画化しなければ、と思いましたが、ただ、資金がない。協力してくれる配給会社や企業がありませんでした。そんな時、ある大企業の会長が決断して、500万円を投じてくれました。トルコの大統領にも直接提案しました。助成金がわずかしかなかったなど困難な状況でしたが、トルコが日本へ親書を送るなどして、両国で協力して映画を作ることになりました。熱意は伝わる。国をも動かす、と実感しました。

この映画で、和歌山とトルコの人々から大切な言葉を教わりました。「まごころ」です。船から投げ出された船員を無我夢中で助けた串本の人々。「私たちは陸路でも帰れる」と日本人に飛行機の座席を譲ってくれたトルコの方々。民族や言葉の違いを超え、他者を救う「利他」の心は同じです。そして、もう一つ。「積み重ねる力は奇跡を起こす」。どんなに小さな力でも、積み重ねていけば必ず思いはかないます。

田中監督講演

田中監督講演

文は栢野ななせ、渡辺征庸、写真は金沢修が担当しました。